



「お金をかけない事業承継—かわい  
後継者には個人保証を継がせろ—」

津島 晃一 (平24MBA) 著  
(同友館 1,600円+税)

本書は、単なる事業承継のハウツー本ではない。まして書名の「お金をかけない」というのは、「安上がり」という意味ではない。本書は、実際に事業を引き受け、引き渡した著者の経験と、他の多くの事例分析とを統合した研究書である。中小企業の事業承継は、日本経済にとって喫緊の課題となっている。にもかかわらず、本書を読めば、従来の取組みに不安を覚えてくる。事業承継といえば税金対策というイメージが世間一般どころか、金融機関や税理士などの専門家にも蔓延しており、甚にあふれる事業承継対

策本も、親族承継を前提とした株式に係る相続税対策に焦点を絞ったものが多い。しかし、本書によれば、税金対策は、重要ではあるが、本質的な問題ではないという。責任をもつて事業を引き継ぎ発展させようとする後継者がいないことは、そもそも事業承継は始まらないからである。そこで本書は、親族をあてにせず、非親族承継を促進すべきとの立場から、「日本の事業承継—個人保証の引継ぎ」という仮説を提示し、著者自身の体験を、他の34人の非親族承継を経験した社長へのインタビュー結果と絡めて、この仮説を検証している。たまたまうまくいった1ケースの紹介ではない。

本書の特徴は、借入金と個人保証の効用を説いているところにある。経営者の個人保証に頼らない融資慣行を拡大するという政府の政策とは真逆の発想である。借入金があると、金融機関との長期的連帯関係が、経営者の権力の源泉になるとともに、経営監視の機能も果たす。そして、経営者の個人保証は、誠心誠意経営し責任を取る覚悟を、金融機関のみならず、従業員や取引先といった会社の内外に知らしめ、彼らの支持を得るのに役立つ。

つ。確かに個人保証は危険で苦しい。しかし、苦しくなければ、信頼も得られないのである。

さらに本書には、中小企業の後継者難を解決するための処方箋だけではなく、個人保証の力をキーワードとして、経営理念や経営計画の策定から人材育成や金融機関との付き合い方まで、中小企業経営一般についての示唆に富む極意が詰まっている。

著者は、25歳で請われて大手電機メーカーを退職して郷里の中堅企業の取締役就任し、35歳で社長に就任したものの、30歳の頃に立てた人生設計に従って、53歳で会長就任、57歳で取締役退任というビジネスマン人生を全うしながら、会長就任後には神戸大学大学院経営学研究科でMBA、さらに嘉悦大学大学院で博士の学位を取得し、現在も事業承継に関する研究を続けながら講演・執筆活動をされている。人生100年時代を生き抜く一つのモデルとしても、本書は一読の価値がある。

鈴木 一水  
(平2営博、経営学研究科教授)